

者の分離を主張する。ただしトクヴィルは、宗教を私事化して影響力を小さくしようとしているのではなく、宗教の自己限定を通して、民主主義の時代における宗教の機能を効果的にしようとしている。また、ルソーにとってカトリックは反社会的で、共和主義的な政治にとって害をなすとされるものだが、トクヴィルから見たカトリックは、社会的に有用なものである。

コントやトクヴィルが属していた時代は、宗教批判の時代ではあっても、宗教の社会的有用性については基本的に疑問符がつかない時代であった。デュルケムは、宗教の社会的有用性が自明ではなくなりつつあった時代において、社会的なものと宗教的なものとの本質的な同質性を改めて取りあげた。デュルケムから見ると、ルソーの「自然」は社会の外部として現われる。ところでデュルケムの企てとは、まさにこの外部を取り除くことにあつた。またデュルケムは、個人と国家のあいだに一連の中間集団を挿入することを提案し、ジャコバン・モデルを相対化している。ただしデュルケムは、近代国家が同業組合から個人を解放する役割を演じることを踏まえている点では、ルソーに近づく。また、モナ・オズーフが指摘するように、デュルケムの集合沸騰論と、祭りにおける人びとの一体感を語るルソーの議論をつなげることも可能だと思われる。

市民宗教の問題は、それまで他律の回路によって政治権力を正当化していた社会が自律化し、新たな社会的紐帯の構築という課題を前にするとき最も先鋭化する。本発表で取りあげた論者はみなこの問題を共有していたが、やはり各論者のニュアンスは異なっている。

一九世紀アメリカ合衆国の健康と宗教実践

佐藤 清子

本発表においては、十九世紀前半のアメリカ合衆国の健康／宗教論をとりあげ、それらがプロテスタントのアメリカ人に新たな生活上の実践をもたらすとともに、非プロテスタント的な宗教実践を、「不健康な習慣」としてより一層異化しようとしたことを示した。

十九世紀前半は、病気そのものや、病気に伴う苦痛の軽減に對して、医学が必ずしも有効ではなかった時代である。そうした中、医師に頼らず健康を獲得するための様々な健康論や代替医療が発明、紹介された。ヨーロッパ由来のホメオパシー、水治療、アメリカ生まれのトムソン主義やグラハム主義などが挙げられる他、モルモン教やアドヴェンティスト派、キリスト教科学といった、この時代の新宗教にも、健康への高い関心は反映されている。

アメリカ合衆国の主流を為しつつあつた福音主義プロテスタントの人々にとって、プロテスタント信仰の枠をはみ出す新奇な宗教論を伴う健康論は簡単には受け入れられないものだったはずである。しかし、健康が善かつ自然の状態であり、自然の法則を学んで実践することでそれは獲得される、という、科学的、非科学的を問わず、当時の健康論一般に共通した考え方は、啓蒙主義の影響を受けた同時代のプロテスタント信仰とも馴じみがよいものであつた。十九世紀のアメリカ人は、時には正統的福音派プロテスタント信仰の枠内にとどまりつつ、またある場合には、ユニテリアンなど、啓蒙主義の影響をより強く

受けたキリスト教信仰を背景として、健康法や代替医療に接近した。新たな健康論は、必ずしもそれらと齟齬を来すものではなかったのである。

プロテスタント信仰は健康論と結びつくことで、非プロテスタント的宗教への批判言説としても働いた。この時代の反カトリック主義の言説の中には、カトリックに特徴的な、跪いての祈りや様々の信心業が、体に負担を強いる不健康なものであるとの議論が見られる。健康という価値は、プロテスタントの宗教と結びつき、異質な宗教、とりわけその実践的側面をよりいっそう異化するとともに、健康のために規律化された生活習慣という、新たな宗教的实践とすら呼びうるものをアメリカ人にもたらしたのである。

黒人運動にみる宗教的家族組織の形成

——米国のオリシャ崇拜より——

小池 郁子

本発表の目的は、アメリカ合衆国の黒人運動に携わるアフリカ系アメリカ人(アメリカ黒人)が、宗教的家族組織を形成することに何を求め、その活動によって何を実践しようとしているのかを明らかにすることである。そのうえで、彼らが地域社会や家族をどのように経験し、語り、また、いかに対峙しようとしているのかを考察する。本発表は、アメリカ黒人の抱える社会問題を、彼らに特有の逸脱した家族像に還元する傾向を再考し、さらに、黒人運動によって展開されるアメリカ黒人男性向けの支援活動を、家父長制や伝統的価値観の無批判な復興と

は異なる視点から論じることの布石としたい。

黒人運動の一つ、オリシャ崇拜運動は一九五〇年代後半に米国で組織化された。これは、オリシャと呼ばれる西アフリカ、ヨルバの神々を崇拜する宗教・文化実践を核にした運動である。運動が組織された当初は、「反白人・反キリスト教」主義を標榜していた。しかし、一九八〇年代半ばより、コミュニケーション内外の問題からその運動理念は時代とともに変容し、コミュニケーションを中心とした一極集中型の運動形態から、米国の各地に点在する成員個人の宗教的家族組織(イレニ)を軸にしたものへと移行してきている。

米国の地域社会や家族をめぐっては、多くの議論がなされてきた。たとえば、家族論では「母親」「母性」という視点が強調され、女性に注目がおかれてきたこと「杉山二〇〇七」、あるいは、米国の奴隷制という歴史を踏まえれば、「家族」という制度には人種的、階級的差異は必然であるにもかかわらず、少数派にも主流の規範的家族モデルを踏襲することが要求されてきたことの問題などが論じられている「杉山二〇〇七」、アチオプ二〇〇一、フックス二〇一〇」。また、米国の特徴の一つとして、個人と国家のあいだを担う民間部門が強力であり、とりわけコミュニティ(「地域社会」)や家族は、自己統治という側面で重要な役割を担ってきたこと、さらにそこにはキリスト教保守派の影響が色濃く認められることが指摘されている「久保二〇〇七」。

そこで本発表は、オリシャ崇拜運動によって宗教的家族組織が展開される事例の一つとして、米国南部の「男性結社 Low-